ARMS MAKER'S　刃の姫

mick

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＡＲＭＳ　ＭＡＫＥＲ'Ｓ　刃の姫

【Ｎコード】
Ｎ７０５６Ｚ

【作者名】
ｍｉｃｋ

【あらすじ】
「最強たるは誰なりしや？」剣術大会で万年二位と誹られ、武器殺しとありがたくない異名を冠するヒイロ＝ライナードは、ある日ソード・メイカーを名乗る不思議な少女に出会う。その日を境に平和な街では不可解な事件が起き始める。警備師団の団長であるヒイロは、わけもわからず事件に巻き込まれていくが・・・・・。

プロローグ（前書き）

メリークリスマス企画。
クリスマスに何かできればなぁと思い、小説をＵＰしました。
ダークファンタジーなので、クリスマスらしさはちっともございませんが、
読んでいただけると幸いです。
２４日中に、１章全話投稿の予定となっております。

※戦闘シーンなど、刺激が強い描写が含まれますので苦手な方はおひかえください。

プロローグ

>i3500６｜９６５<

玉座に坐(すわ)りし王は、疲れたようにつぶやいた。
うつろな目で、ひれ伏す己の血を引く子供らを見つめる。

最強たるは誰なりしや？
いざや始めん、終焉(しゅうえん)の宴を・・・・・・。
坐(すわ)れる玉座はただ一つ、頂たる王冠もただ一つ。

己の武器を手にとりて、争えや争え。
我が選びしはただ一人。
世界の王はただ一人。

最後に大地に立ちし者、その者に我は全てを与えん。
王はそれ以上は何も語らず、玉座から立ち上がり去った。

王の子らも己が武器を手に取り、その場を去った。

それはもう、はるか昔の出来事・・・・・・。

武器殺しと不思議な少女

剣戟が響く。
一撃、二撃、三撃・・・・・・。
怒号のような歓声が上がっているが、まるでどこか遠い世界のようだった。
俺の周りでは世界が静かに流れている。
再び剣が交わり、俺は刃へと目を走らせた。あと何撃持つだろうか？
こぼれた刃は、今にも亀裂を走らせそうだった。
せめて数撃持てばと思ったが、そう都合良く事が運ぶはずもない。
嫌な音を立てて剣が砕ける。

「・・・・・・っ」

まずいと思ったときには、試合相手の刃がのど元に突きつけられていた。

「勝者っ、カルザス＝マッケローニっ！」

わぁぁっと今日一番の大歓声があがった。勝利を祝う紙吹雪が舞い、カルザスは拳を振り上げ、観客に応えた。
あぁ、またなのかと俺はがくりと地面に膝をつく。
急に俺の耳に、周囲の騒音が戻ってきた。
万年2位のヒイロ＝ライナードはまたも記録更新と嘲笑が聞こえる。大穴で俺に賭けていた観客からは、罵倒が飛びだす。
俺は思わず叫びそうになったが、ぐっと唇をかんで耐えた。
負けたのは事実で、言い訳など口にするのはみっともない。

目を伏せ、未消化のままで終わった熱を、ため息として吐き出し、折れた剣を拾い上げ、俺は黙って試合会場をあとにした・・・・・・。

荘厳（そうごん）な石造りの門を出たところで、俺は陰鬱（いんうつ）な表情で空を見上げる。

青々とした空と裏腹に、俺の気分は曇天模様。

そんな俺の背に、からから笑いながら年の寄った守衛が声をかけてきた。

「まぁ、そう落ち込むなよヒイロ。勝負は時の運と言うじゃないか」

「なら、俺はよほど運から見放されてるのだろうな」

今日の公式剣術試合で１００連敗だ。

剣の道で生きると決め、街の警備師団へと就職し、時間を作っては剣術試合に挑戦し続けているのだが、結果はことごとくも優勝を逃し続けている。

「せめて、もうちっと良い剣を買って出場できんのかね？」

「それができるなら・・・・・・とっくにそうしている」

ギロリと睨む俺に、守衛は口をつぐんだ。

守衛に八つ当たりしたところなどするものではないと、俺はばつが悪く感じて、首を横に振った。

折れた剣を見つめる。この修理費をどう捻出（ねんしゅつ）すればいいのかが目

下の問題だろう。
生来実家が貧しいせいもあるが、不景気な世の中というか俺の羽振りはそう良くない。
今回の試合とて、優勝賞金目当てという、なんとも俗っぽい理由で出たというのが現実だ。

「達人は獲物など選ばない。負けたのは俺が弱いからだ。俺の腕が良いならば、剣は折れたりなどせず、相手ののど元につきつけられていたはずなんだ」

ざぁっと強い風が俺の黒髪をなぶった。
とぼとぼと、今日の戦いを思い出しつつ市街へ向かう足取りは重い。
決勝戦の相手が強いとは、それほどは感じなかった。
動きは全て読めていたし、剣が折れるまでは事実俺が追いつめていたのだから。

万年二位の他に、俺にはもう一つのあだ名がある。
武器殺しのヒイロ・・・・・・。
俺が試合に負けている最たる理由。

剣の撃ち合いで負けたのではなく、いつも先に武器が壊れて負けているのだ。
先ほどの守衛が言ったように、安物ではなくもっと質の良い剣を使えばと思い、断腸の思いで出費したこともあったのだが・・・・・・。
結果はいつもと変わらない。

「やはり俺の腕が悪いからなのだろうな」

そう結論づけたときだった。
くすくすっと笑い声が頭上から響く。
「解ってないのですね、そこの貴方。達人は獲物(えもの)を選ばない？　ご冗談でしょう。そこそこ腕が立つ程度の半端者だからこそ、選ばずとも良いのです。真に腕が立つ剣士とは、それこそ精密なほどに武器を選ぶ必要があるのです」
ふいにかけられた言葉に俺は驚く。
随分と高慢な物言いだが、聞こえる声はあどけなかった。がさがさと木の枝か揺れ、くるりと枝を掴んで一回転し、しゅたっと少女が地面に軽やかに着地する。
少女は栗色の長い髪を黒いリボンでとめており、上等の紅色のドレスをまとっている。
このあたりでは見ない子供だった。
少女はドレスの裾をちょこんとつまみ、深々と俺に向かって一礼する。醸(かも)し出す雰囲気(ふんいき)で、どこぞの貴族の子供なのだろうと俺は苦い顔をした。
「先ほどの試合を見ていました。ほんっとうに無様な試合でしたね」
出会い頭に失礼極まりない言葉だった。
少女はまるで楽しむかのように、猫のようなエメラルドの瞳を細める。
「それはどうも。貴族に対し非礼だとは思うが、俺はそんなに暇じゃないのでな」

少女を無視し、俺はすたすたと横を通り過ぎた。こういうのに関わるとろくな事がない。
去っていく俺を少女は慌てて追いかけ、小走りで付いてくる。
「待つのです！　人の話はきちんと最後まで聞きなさい。この唐変木(ぼく)っ」
「きちんと聞いて欲しいならば、貴族と言えど言葉には気をつけられよ」

眉をつり上げ憤慨する少女に、俺は立ち止まって真面目な顔で説教をたれた。
どうにも貴族の子供というものはしつけが悪い。
たまに剣術の指南を依頼され、貴族の家に出向くこともあったが、そのたびに嫌な思い出しか積み上がらない。
実戦向きではなく、教養のための剣術の指南。
ちょっと厳しく指導すれば泣き言を言い出し、わざと負けてやらねば機嫌(きげん)をそこねる。
依頼料だけは破格(はかく)のため、生活のためと我慢はするが、それ以外で貴族に関わり合いになりたいと俺は思わなかった。
少女はむっとしていたが、俺の言葉に思うことがあったのだろう。
こほんと咳払いして、お腹の前で指を組む。
「た、確かに貴方の言うことにも一理あるかも・・・・・・です。名前も名乗らずでは話にならないでしょうから」

いや、別に名前を聞きたいわけではなく、俺はかまってほしくないだけなのだが。
その一方的な態度こそ問題にすべきなのだと思ったが、それはあえて指摘はやめておいた。
相手はまだ子供なのだ。同レベルで張り合ってどうする？

俺がしぶしぶ少女に向き直ると、少女は満足げに微笑んだ。

「私の名前はメディア。メディア＝クラインヴェル」

「俺はヒイロ。ヒイロ＝ライナードだ。この街で警備師団の団長をしている」

「知っているのです。武器殺しのヒイロ、飛ばず泣かずのヒイロ・・・・・なんともけったいな異名は有名なのです」

「・・・・・・・・・・・・」

ここは一発教育的指導で、この少女・・・・・・メディアの頭を小突いても良いだろうか？　と俺は思った。

飛ばず泣かずのヒイロ。勝手に変な異名を増やすなと言いたい。

むすっと黙り込む俺を無視して、メディアは腰に手を当て、えへんと胸を張って話を続ける。

「始まりの武器精律術師の直系、クラインヴェル家に生まれた私は、稀代のソード・メイカーなのです」

「武器精律術・・・・・・ソード・メイカーだと？」

唐突に意味不明な単語を持ち出され、俺は眉を吊り上げた。

やけに偉そうなメディアの態度に辟易（へきえき）してるせいもあったが。

だから、俺は胡乱（うろん）な目をメディアに向ける。

これは一体何の「子供のごっこ遊び」なのかと・・・・・・。

「ほぅ、それでそのソード・メイカーとやらが、一体この俺に何のようなんだ？」

「私が貴方を勝たせてやるのです」

自信満々にメディアが言い切ったので、俺は不快に感じて目を伏（ふ）せた。

勝たせてやるだと？　ずいぶん恩着せがましい言葉だ。
たまたま試合で見かけた俺に、高価な剣でもほどこしてやろうというところか？
馬鹿馬鹿しいと俺は吐き捨てる。
メディアは憤った俺におどろいたのか、目を丸くした。

「俺はほどこしなど受けん。妙なあだ名のついた気の毒な剣士の噂を聞きつけ、パトロンにでもなって、話のネタにでもしたかったのか？　暇つぶしならよそでやれ」
「え？　あっ・・・・・違っ・・・・・・・いや、違わないのかも？」

メディアは慌てて否定しようとしたが、次の瞬間、神妙な顔をしてぼそりと呟く。
その姿に、やはりかと俺の中に失望が広がった。
嘘をつかずに本音がぽろりとこぼれるところが、子供らしいと言えば子供らしい。
まぁ、当初から期待などというものを、かけらももっていなかったのだから、これは失望と言うよりも呆れと言うのが正解だろう。
悪意からの言葉ではなく、子供のただの浅慮だ。いちいち相手にして目くじらたてる必要もない。
付き合いきれないと、俺はメディアに背を向けた。

「何処に行くのです？　まだ話は終わってないのですよっ」

足早に去っていこうとする俺に、メディアは追いすがる。
これ以上何を話すというのだろうか？
きゃっと言う悲鳴と、どしんっと背後で何かが倒れる音がし、俺が振り向けばメディアが地面へと伏していた。
ひらひらしたドレスなど着て走ろうとするから、足下が見えずに

転ぶのだ。
うっと痛みでうめき、涙を浮かべるメディアと視線が合う。
俺は助け起こそうと手を差しのばしかけてやめた。
いつもなら手を貸すところだが、これ以上つきまとわれるのはごめんだった。
手を引っ込めると、恨みがましそうにメディアがおれを見上げる。
「待ちなさい！　ヒイロっ、私は貴方に大切な話があるですっ」
話など聞きたくない。
話を聞いてやれるほどの余裕など、試合に負けて気が立っている今の俺にはなかった。
「待てと言っているのに、この唐変木（とうへんぼく）っ！　レディーが困ってるのに、見捨てていくのが男のすることなのですかっ？　ヒイロっ戻ってくるのですっ。今なら数々の非礼は寛大（かんだい）な処置で許してやるのですっ。ヒイロっ、ヒイロ＝ライナァァァドォォォっ・・・・・」
とても許してくれるような絶叫ではない。むしろ呪い殺されそうだった。
俺のことを見知っている通行人からの、何事かと驚いたような視線が痛い。
俺はメディアの罵声から逃げるため、さらに歩調をはやめる。
貴族のお遊びに付き合える余裕がある奴に、話を持っていってくれと、俺は気まずい思いをしつつも、メディアの静止を無視して帰宅を急いだのだった。

最強たるは誰なりしや？

警備師団、それは街の治安を維持(いじ)する組織だ。
どの街にも必ず一つは存在し、主に犯罪者の取り締まり、けんかの仲裁、役所と協力しての捜査、催(もよお)し物の警護など、仕事内容は多(た)岐(き)にわたる。つまるところ、何でも屋という意味合いに近い。
俺が所属する街の警備師団はの名称は、紅蓮(ぐれん)の獅子１２師団と言う。
いささか大仰すぎる師団名だと俺は思う。なぜなら・・・・・・。

「平和っすねぇ・・・・・・」

湯気(ゆげ)の立つマグカップをゆらしながら、同僚であるデイルが机の上に伸びていた。
目を細めて幸せそうに、春に陽気(ようき)にまどろむその姿はまるで・・・・・・。

「紅蓮の獅子と言うより、黄色の猫だろう」

俺はぶるぶると怒りに震えつつ、師団の備品である剣を磨(みが)く手を止めた。
がたりと席から立ち上がり、デイルを怒鳴(どな)りつける。

「たるんでいるぞっ！　警備師団たるもの、いついかなる時にも戦場へ赴(おもむ)けるよう、常日頃から気を引き締めてっ」
「そう言われても、ヒイロ団長。大陸５カ国中、我がソーディアス国は最も平和な国だと言われてるんっすよ？　ここ数十年、地方の小競り合いはあっても、戦という戦もなく、剣の国と謳われた建国の当時の影もなく、武芸に関しては衰退(すいたい)の一途をたどるばかりじゃ

ないっすか」

むくりと顔をあげて、口をへの字に曲げるデイルに、俺はうぐっとつまった。

俺が住まうここ・・・・・・ソーディアス国は、かつては剣の国と言われるほど、優秀な剣士が切磋琢磨(せっさたくま)するお国柄だった。

それも建国の王であるソーディアス1世が、稀代の剣士であったことに由来する。

窓から外を見れば、ポールにへろんと絡みつく国旗が見えた。

そこには剣をかたどった厳めしい文様が刻まれているのだが・・・・・・。

今のソーディアス国を象徴するならば、文様を羽ペンにでも変えた方が良い。

「それに、俺たちが警備する12区は都市といえど、辺境ですからね。俺がここに就職して出動したのって、酔っぱらいのけんかと、夫婦仲違いの仲裁だけ。気を引き締めろって言われても、これじゃぁねぇって思ってしまうっす」

街の人から穀潰(ごくつぶ)しと言われ、配属されているのは俺とデイルを含めてたった10人。

デイルの言葉に俺は何とも言えない顔をした。

師団をまとめる団長として表面上はともかく、心の中では激しく同意したい。

重いため息をついて、俺が再び椅子(いす)に腰をおろすとくすくすと笑う声がした。

「笑い事ではないだろう、アーヴィン」

「いや、すいません。団長・・・・・・・団長の顔がおかしくって」

アーヴィンは薄い色の金髪を揺らして笑い続けた。
俺はむっとして顔を朱に染める。
さとい奴だから、俺が胸中で何を想像したのか表情で察したのだろう。
それほど表情に感情が出ているのだろうか？　と俺は壁の鏡を見て自分の頬をさすった。
アーヴィンはようやく笑いがおさまったのか、息を整えて窓を開け放つ。
外では子供達が元気に走り回り、アーヴィンの姿を見つけて手を振った。

「いいじゃないですが、団長。平和に越(こ)したことはないですよ」

優しげに子供達を見つめて、アーヴィンは手を振り返す。
幸せそうなその姿に、それもそうかもなと俺は相づちを打った。
アーヴィンは去年の暮れに結婚し、今は身重の妻を抱えている。
騒動など起きなければ良いと思うのは、当然なことだ。
俺の考えこそ、時代錯誤(じだいさくご)と言われてもそれは仕方ないのかもしれない。
落ち込む俺に、アーヴィンは悪戯(いたずら)めいた表情を浮かべる。

「団長も早く嫁を貰ったらいいじゃないですか」
「・・・・・・それは嫌みか？　アーヴィンよ」
雉(きじ)も鳴かずばうたれまいとはよく言ったものだと俺は思う。
俺は立ち上がって、アーヴィンの首をがしりとホールドした。アーヴィンはうげっとカエルのような声を出す。
「団長は、人が良すぎるんですよ。他の男に譲(ゆず)ってばかりで」

アーヴィンはそう言うが、譲(ゆず)った覚えは一切無かった。
気がついたときには、いつも余所(よそ)の男のものになっていただけで。
さすがに他人のものになった女に、横恋慕(よこれんぼ)するつもりはない。
いや、横恋慕するほど自分のものにしたいと思うような女に、いまだかつて会ったことがないだけの話なのだが。デイルが言うには俺は鈍(にぶ)いらしい。
仕事もなく俺たちがふざけあっていると、とんとんとドアが叩かれた。

どうやら珍しく、来客がやってきたらしい。

「はいは～い、ちょっと待ってくださいよ～」

警備師団の剣士とは思えないような返事をあげ、デイルがいそいそとドアへと向かう。
よほど暇をもてあましていたのだろう。
嬉々として出向いたデイルは、ドアを開けて外に出る。
どうせまた、くだらないけんかの仲裁か何かなのだろう。
デイル一人に任せておけばいいと、俺は再び剣を磨(みが)く作業に戻ろうとした。

しかし・・・・・・。

「だ～んちょ。ヒイロ団長」
「なんだ、デイル。何か大事か？」

外に出たデイルが、俺を呼びに戻ってきた。
ひょっとしたら、大人数での乱闘騒ぎか何かなのだろうか？　それにしては緊張感のかけらもないデイルの声に、俺はいぶかしげな顔をする。

「大事と言えば、大事かも。なんと、団長にお客さんっす」
「客？　俺にか？」
「えぇ、それはもう、とびっきりの美女っすよ」
含(ふく)み笑うデイルに、俺はなんとなく嫌な予感がした。
そもそも俺の近しい知り合いに、美女など存在しない。
一体誰だ？　と俺が外に出ると、平行な目線の先には誰も存在しなかった。
視線をゆっくりと下へと移動させ、確認した姿に俺はこめかみを押さえる。
「よくも昨日は無視して置き去りにしてくれましたね、この唐変木っ」
昨日出会った、貴族の少女がそこにいた。

ここは託児所(たくじじょ)ではないと俺は思う。
だというのに、こいつらは・・・・・・と、俺は苛々(いらいら)としながら剣を磨(みが)く。
「へぇ～、お名前はメディアちゃんって言うんすね」
「子供扱いしないで欲しいのです。私の事はレディー・メディアと呼ぶがいいかと・・・・・」
「はい、メディアちゃん。紅茶ここに置いておくね」
「だからっ、子供扱いするではないと言っているのですっ」

怒りつつもアーヴィンから受け取った紅茶に、メディアは砂糖を2杯とミルクをたっぷり。
その光景にどう見ても子供だろうと思いつつも、3人は突っ込みはしなかった。
メディアはこくりと紅茶を一口含むと、眉をしかめた。
「安物なのですね。香りもなにもしないではないですか」
まずいとメディアは文句をたれる。
ミルクをあれだけ入れておいて、香りもへったくれもあろうはずがないというのに。
俺が目を据わらせて立ち上がると、アーヴィンがぎょっとしてすっ飛んできた。
俺の身体を拘束し、アーヴィンは必死で訴える。
「団長、お、落ち着いてください。相手は子供です」
「放さんか、アーヴィンっ！　子供だからこそ、今のうちにしつけというものをだな」
「団長のはしつけのレベルを超えてますっ。前も貴族のお坊ちゃんを稽古だからと笑顔で叩きのめして、謝礼金をもらい損ねたのを忘れたんですかっ」
アーヴィンの言葉に、俺は冷や水をあびせかけられたように硬直する。
意にそわぬ仕事に従事したというのに、謝礼金はもらえずじまいと、思い出したくもない過去が脳裏にかけめぐった。
そうだったなと、俺はがくりと脱力して床に手をつく。
「ふぅん・・・・・・そっかぁ。メディアちゃんはクラインヴェル

家のお姫様で、ソード・メイカーってのなんっすねぇ。ところで、ソード・メイカーってのは一体何？　最近貴族の子供達の間で流行(はや)ってるごっこ遊びか何かっすか？　うん？」
「違うのですっ！　なんですか、ごっこ遊びとは。ソード・メイカーを馬鹿にしているのですかっ？」

意外と子供好きなのか、デイルはマイペースにメディアの相手をしている。
メディアは、デイルの雲を掴むような態度に不満をあらわにしていたが、やがてあきらめたように嘆息(たんそく)した。

「仕方ないのです。ソード・メイカーは建国にまつわる歴史の裏舞台。史書にも登場してこないのですから、下々の者達が知るよしもないのです」
「ほぅ、それはまた壮大(そうだい)な設定っすね」

俺はよくもまぁ、こんな作り話に付き合えるものだとデイルに感心した。
もともとゴシップやら、とんでも話が好きな奴だから、メディアの話は退屈しのぎにちょうど良かったのだろう。
続きはと、興味津々に尋ねるデイル・・・・・・。

俺は馬鹿馬鹿しくなって、奥の鍛錬場に引っ込もうとした。そんな俺に、待ちなさいとメディアは慌てたように席を立ちあがった。

「最強なるは誰なりしやっ？」

メディアの発した言葉に、俺は足をぴたりと止める。
振り向く俺に向かって、メディアはくすりと笑った。
「最強なるは誰なりしや？　選ばれし者に王位を与えん・・・・・・

もともと、この5大国がまだ1つの国だったときに、ときの賢王アルマキアスが5人の子供らに言ったと伝えられる言葉です。それぐらいは知っているでしょう？」
「知らないわけないだろう。この5大国に住む者なら子供から大人まで知っている話だ」

俺は口をへの字に曲げる。
今は昔、賢王アルマキアスには5人の子供がおり、その5人の子供達は武芸に秀で、各々得意とする武器があった。
槍、弓、槌、銃・・・・・そして剣。
己の最も得意とする武器で戦い、勝ったものに王位を与える。
その言葉のもと、王の子らは武器を手に王位をめぐって熾烈（しれつ）な抗争をくり広げた。
結局、王は勝者を見届けることもなく、王位を与える前に没してしまい、国は5つに分裂してしまったのだが・・・・・。

それがこの5大国の始まりであるというのは、誰もが教養的に知っていることである。

「それで、その昔話がなんだというんだ？」
「この5人の王の子の話・・・・・勝者は決まらずとも、最強の武器は一体何だったのかという話です」

ふふんっと笑うメディアに、俺は素っ気なく返した。

「なんでもいいんじゃないか？」
「なぁっ・・・・・」

俺の言葉にメディアは絶句（ぜっく）した。
どの武器にだって一長一短はある。最終的には使い手の力量で決

まるのだから、武器の種類で善し悪しを決めても仕方がないだろうと、俺が呆れたように言えば、メディアはダンっと机を叩いて立ち上がり激高した。

「何を言っているのですっ。　あ、あ、貴方はそれでも、剣の国であるソーディアスに属する剣士なのですかっ！　なんたる体たらく」

恥を知りなさいと指を突きつけるメディア。

俺はやかましいと顔をしかめつつ、メディアの首根っこを掴みあげた。

猫の子よろしくぶらんと宙に浮いたメディアは、じたじたともがく。

「何をするのですっ。レディーに向かって失礼なっ」

「ここは師団の詰(っ)め所であって、子供が遊びにきて良い場所ではない」

用がないならさっさと帰れと、俺はメディアを外へ放り出そうとした。

話の続きが聞きたいデイルは不満そうな顔をしたが、勤務中に子供の与太話に付き合っていいわけではない。規律は守るべきものなのだ。

子供は子供同士で遊べと俺はドアを開けると、突然飛び込んできた来訪者にどんっとぶつかる。

息せき切って飛び込んできたのは、役所の下っ端の人間のようだった。

本当に今日は珍しく来訪者が多い。

俺は驚いて、メディアをどすんっと床の上に落としてしまった。

きゃんっとか細い悲鳴を上げて、メディアは目をつり上げて俺を睨んでいたが、それにかまっている場合ではないようだ。

役所の者は真っ青な顔で、かちかちと歯を鳴らしている。
ただらなぬ雰囲気に、俺がちらりとアーヴィンに視線を送れば、アーヴィンは水を入れたコップをへたり込んだ役所の者に差し出すが、それを受け取る余裕すらないらしい。

「どうした？　一体何があった」
「し、しょう・・・て・・・街の、ろ、路地にっ・・・・・・し、っし・・・」

膝をついて俺が問いかければ、辛うじて商店街の路地とだけ聞き取れた。
俺がデイル、アーヴィンと呼べば二人はすかさず武器を手にとって部屋を飛び出していく。
メディアはおろおろと右往左往し叫んだ。

「こら、まだ話は終わってないのです。私を放って何処に行くのですかっ」
「それどころではない」
「あぁ、悪いっすねメディアちゃん。お話の続きは、また今度と言うことで」
「気をつけて家に帰るんだよ」

いきなり取り残されて、メディアは立ちつくす。
メディアが我に返って叫ぶ声が背後で響いていたが、それどころではない。
呼び止める声を無視して商店街の方へと俺たちは疾走する。
いつもと何が違う？　と言われると説明しにくいが、あきらかに街の空気は豹変（ひょうへん）し、不穏な空気が蔓延（まんえん）し始めていた。

事件を聞きつけたのだろう。
すれ違う街の人々の表情は、不安げに曇り、ざわざわと声を潜めて話をしている。
そんな状況に、俺の中で得体(えたい)の知れないような、嫌な予感が広がった・・・・・・。

不穏と平和

役所の者が言っていた場所は、師団の詰(つ)め所から遠くない場所だった。
まばらな人影が、商店街に近づくにつれて多くなり、不穏(ふおん)な空気にざわめいていた。
俺たちが人混みをかき分け現場に到着すると、先に到着していた役所の者達が立ち入り禁止のロープを張り巡らせている。
俺たちはそのロープをかいくぐって、路地の奥へと足を踏み入れた。

「・・・・・・っ。なんっすか？これ」

ぶぅんっと黒い羽虫が飛んでいる。
地面にはシートをかぶせられた物体。
広がった黒い染みは、変色した血なのだろう。
春の陽気のせいか、すさまじい腐敗臭(ふはいしゅう)が周辺に立ちこめている。
もともと、平和ぼけしてこういう事件になれていない役所の人間達は、路地のすみの方で嘔(えづ)吐いていた。
俺たちもこういう現場になれているわけではない。必死でのど元にこみ上げる吐き気をなんとか飲み込み、俺はどす黒く血で汚れたシートをめくりあげ、中身の惨状(さんじょう)に思わずうめく。

「ひどい・・・・・・」
「そうだな・・・・・・」
「人間のすることじゃないっすよっ」

耐えかねてアーヴィンが口元を押さえて視線を外した。

デイルはあまりの惨状に、真っ青になって口をわななかせている。
それも仕方がない。シートの中に転がった死体は尋常ではなかったのだ。
胴体は真っ二つに切断され、切断面から内臓がはみ出ており、両手両足、そして首と全てがすっぱりと切断されている。
目を見開いて絶命している表情に、俺は見覚えがあった。

「カルザス＝マッケローニ・・・・・先日の公式試合の優勝者か」
「まじっすか！」

デイルが驚いた声を上げる。
かりにも公式剣術試合の優勝者が、こんな風に惨殺されようとは信じがたい現実だ。
俺は遺体の周辺に墜ちている不自然な金属を拾い上げる。

「これは、もとは剣だったのか？」

俺は金属を拾い集め、地面に並べていく。
断面は非常になめらかで、輪切り場にされた金属を並べれば確かに剣の形となった。
一体何をどうすれば、剣がこのような状態になるというのか。
俺のように剣戟の末で折れたのならば、とてもこんな断面になったりはしない。
こんな、まるでチーズでもカットしたかのように・・・・・。
そんな時、俺の心の中を見透かしたように、疑問に対する答えが返ってくる。

「それは、剣で切り飛ばされたのです」

聞こえた声に、俺は思わずこめかみを押さえた。

デイルとアーヴィンがぎょっとして後ろを振り、慌てて声の主の前に立ちはだかる。

「ちょっ、メディアちゃん。追いかけて来たんすか？　入って来ちゃ駄目っすよっ」

「子供が来て良いところじゃない。早く出て行くんだ」

さすがに咎めるような口調の二人に、メディアはふんっと鼻を鳴らす。

無理矢理にでも追い出そうと手を伸ばす二人の腕をかいくぐり、メディアは死体側まで近寄る。死体を　じっと見下ろしているその表情は、妙に冷めていて、取り乱した様子は微塵もない。

俺はそんなメディアを怪訝に思った。

普通女の子ならば、悲鳴を上げてへたりこみ、下手をしたら気を失ってもおかしくない状況だというのに、メディアはまるでぶつ切りにされた遺体を観察でもするかのような風体だ。メディアは一通り検分が終わったのか、眉をひそめて呟く。

「・・・・・・やはり、これは堕とし者」

「落とし物がなんだと？」

俺の不機嫌な問いに、メディアは視線だけ返した。

またつまらない子供のごっこ遊びの謎かけか何かなのだろうか？

そうならば不謹慎きわまりないことだと、俺は気分が悪くなった。

人が一人死んだというのに・・・・・・。

俺は耐えかねて、メディアを追い出そうと腕をつかみ上げる。

「何をするのです？　この野蛮人っ」

「唐変木から野蛮人に変わったか。子供はこんな所にいるべきじゃない。さっさと家に帰って子供は子供同士で遊べばいい。興味本位

でこんなことに首を突っ込むな」
「興味本位で首を突っ込んで、痛い目見るのはあなたたちの方なのですっ」
「はいはい、メディアちゃん。これ以上はお口をチャックしようっす。うちの団長は意外と気が短いから。お兄さんがお家まで送ってあげるっすよ」

デイルがメディアの口を押さえ、抱き上げて俺から引き離す。
そのことに俺はほっとした。子供に手をあげるつもりはないが、あれ以上メディアが言葉を続けていたならば、胸ぐらをつかみ上げて恫喝(どうかつ)していたかも知れない。
我ながら大人げないなと思いつつも、俺は死体の見聞へと戻る。

「放せっ、放すのですっ！　どうして、どいつもこいつも、私の話をきちんと聞こうとしないのですかっ？　このままだと、大変なことになるのですっ」
「お兄ちゃん達は今忙しいっすからね。おとぎ話はまた暇なときに、ゆっくり聞いてあげるっすから、今日は大人しく帰るっすよ」
「おとぎ話じゃないのですっ！　やっぱり私の事を子供だからって馬鹿にしてぇぇ」

デイルに連れられて、遠ざかるメディアの声・・・・・・。
このままだと大変なことになる。
まるで予言めいたその言葉は、真実そうなってしまうことに、俺はこの時はまだ想像もできなかったのだった。

滅多に事件が起こったことがない１２区での猟奇殺人・・・・・・。

慣れない対応に四苦八苦し、気がつけば師団員達の疲労は限界まで来ていた。

アーヴィンに進言され、交代制で休みを取ることになったのだが、それには俺も含(ふく)まれていたらしい。

休んでくださいと師団員一同から心配されてしまい、俺は１日だけ現場を離れることとなった。

久しぶりに自宅のベットへ戻り、俺は夢さえ見ず泥のように眠った。

小鳥のさえずる声と、窓から差し込む光に意識は無理矢理浮上させられる。

うっすら目を開け、朝かと重い身体をおきあがらせたところで俺は固まった。

「・・・・・・どうして、お前がここにいる？」

なにやら家捜しでもするかのように、俺の部屋を探るメディアがいた。

不法侵入だろうと俺が胡乱(うろん)な目を向ければ、メディアはふんっと胸を張った。

「ちゃんと、許可はとったのです」

「誰にだ？」

「デイルに住所を聞いてここまでやってきたのです。きちんと玄関からはいったのです。そこで出会ったユーリィ姉様に許可をもらったのです」

「デイル、ユーリィ・・・・・・」

俺は顔を手で押さえてため息をついた。
ユーリィというのは、俺の年の離れた妹だ。
気立ても良くてしっかり者。それなのに、何故こんな得体の知れない少女を俺の部屋にずかずかあがらせるのか。
しかも、デイルよ。お前俺に休めと言ったくせに、こんな爆弾を押しつけてどうする？
後で覚えていろよと拳を握りつつ、俺は説明をもとめるために1階へと降りた。

「あら、おそようございます。お兄ちゃん」
「・・・・・・おはようございますだ」

口の端をつり上げ、俺はユーリィに挨拶を返す。
そんな俺に、ユーリィは吹き出した。

「あれは一体何のつもりだ？　ユーリィ」
「だって、お兄ちゃん。お兄ちゃんにあんな可愛い彼女ができたなんて、私知らなかったんだもの。私は貴方のお兄様のパートナーですなんて、出会い頭に説明されちゃったら、これはもう妹としては応援しなきゃって」
「せんでいいっ！　全く何を考えているんだ」

俺とメディア、一体いくつ年が離れていると思っているのか。
けっして幼女趣味などではないからなと、俺は憮然としてダイニングにある椅子に腰掛ける。いつまでもお腹を抱えて笑い続けるユーリィに、俺は勝手に妄想してろと吐き捨てた。
一度ツボに入るとなかなか抜け出せないらしい。

そんなこんなで、朝一番のくだらないやりとりをユーリィとして

いると、上の階から、とてとてと軽い足音を立ててメディアが降りてくる。

「あら、メディアちゃん。調査は終わったの？」

「なんのことだ？」

俺がいぶかしげな顔をしていると、メディアはさも当然そうに宣う。

「自分のパートナーの、素行調査ぐらいはしておきたいものなのです」

「ほう・・・・・そんな一方的な説明で、俺の部屋を勝手に荒らしていた正当性でも主張するつもりかお前は」

「それで、それで？　メディアちゃん。何か不審なものの一つでも見つかった？」

興味津々とばかりに目を輝かせるユーリィに、ふぅっと頬に手を当てメディアはため息をついた。

「それが全然なのです。お母様は年ごろの殿方の部屋には、色々女性に見られたくないものがいっぱいあるのよ。相手の趣味を知りたいなら、ベットの下とかタンスの裏とかをチェックしなさいと仰っていたのに。無くて良かったと思う反面、期待はずれもいいところなのです」

「えぇ～つまらな～い。真面目すぎてつまらな～い。何も意外性がなくてつまらないよ、お兄ちゃん」

俺はがたりと椅子からずり落ちそうになる。

こんな年端もいかない少女に、一体何を教えているんだ？　と俺は呆れてため息をついた。

いったい、どういう母親なのだろうか。
ユーリィと言えば、メディアの答えに指をくわえて、しきりにつまんないと呟いている。
なにを期待していたんだ・・・・・・ユーリィ？

「まぁ、それはさておき朝ご飯にしましょう。メディアちゃんも食べていくわよね？」

にこにこと皿を並べるユーリィに、メディアはもじもじしつつこ頷く。
部屋には香ばしい朝食の香りがたちこめていた。ぐぅっとなるお腹の音に、今のは自分ではないと釈明するメディア。俺はその子供らしい仕草に、しかたないなと苦笑いした。
メディアはふんっとそっぽを向きつつ、椅子の前に立つ。

「ヒイロ、椅子を引いて欲しいのです」
「・・・・・・はいはい、お姫様」

こういうところは本当に貴族らしい。俺は席を立って椅子を引いてやる。
メディアは満足そうに頬を緩め、席に座った。ユーリィ特性のパンケーキには生クリームとジャムが添えられており、メディアは目を輝かせてフォークとナイフを手に取った。
紅茶の件でわかっていたことだが、メディアはかなりの甘党のようだ。

「・・・・・・太るぞ」

ぼそりと呟いた俺に、メディアとユーリィが鬼のような形相で睨んできた。

「デリカシーがないなんて、最低よね」
「全くなのです。女性に体重の話をふるなど、万死に値するのです」
一般論を述べただけなのに、何故ここまで怒られなければならないのか。
理不尽だと思いつつ、俺はブラックコーヒーをすすりながら新聞に目を通す。
そこには、殺人鬼いまだに捕らえられずの文字が大きく載せられていた。苦いコーヒーがさらに苦みを増したような気がした。
そんな俺の心情を余所に、メディアとユーリィの楽しげな会話が続く。
「それで、メディアちゃんは今日この後どうするの？」
「この後？　この後は・・・・・・」
むぐむぐとパンケーキを咀嚼し、メディアは紅茶を飲んで人心地つくと、とんでもないことを言い出した。
「今日はヒイロにエスコートしてもらって、街を散策するのです」
「デート、デートなのねっ」
興奮気味に叫ぶユーリィに、俺は思わずむせてコーヒーを吹き出した。
汚いと氷のような二人の視線が突き刺さったが、それどころではない。
俺はフキンで机をふいた後、メディアに苦々しげに言った。
「俺はそんなことを了承した覚えはない」
「アーヴィンが了承したのです」

ぐっと親指をつきたてるメディアに、俺は馬鹿なと驚愕(きょうがく)した。

「何故だアーヴィンっ！　お前だけは俺の味方だと信じていたのに。あの裏切り者め・・・・・・デイル同様俺に休めと言っておきながら、これ如何(いか)に？　ひょっとして、俺はアーヴィンに本当は嫌われているんだろうか・・・・・・」

ユーリィはへこむ俺の背をばしりと叩く。

「いいじゃない。どうせ、家でゴロゴロしてるだけなんでしょう？　いっつも休みは鍛錬(たんれん)だとか、剣術の試合ばっかなんだから、たまには街に出て遊んでおいでよ、お兄ちゃん。あ、メディアちゃんはその前に～・・・・・・」

「なんなのです？」

きょとんとするメディアに、ユーリィの口元はにやりと半月状に弧(こ)を描く。

デートならばおめかししないとねと・・・・・・。

あぁ、またユーリィの悪い暴走が始まったのだと俺はうなだれた。

不釣り合いな武器

「完璧だわ・・・・・・さすが私。グッジョブ」

渾身(こんしん)の出来と言わんばかりに、ふぅっと息を吐いて額の汗をぬぐうユーリィ。

メディアは自分の格好をしげしげとものの珍しげに見つめていた。

「下々の者はこういう格好をするものなのです？」

「いや、違うだろ」

俺は誤った知識を植え付けられてはたまらないと、すかさず訂正を入れた。

白いブラウスと水色のスカート。背には天使の羽がつけられている。

これは今１２区で行われている春祭りのポピュラーな仮装の一つだ。ユーリィが子供の時に同じ格好をしていたのを覚えている。後生大事にその時の衣装を保管していたのだろう。

「やっぱり、髪は三つ編みに・・・・・・・いや、そうじゃないでしょうユーリィ。考えるのよ・・・・・・二つに上げて上にアップして、でもでもこれだけ綺麗な長い髪なのよ？カーラーで巻いてしまいたいいいい」

右往左往しつつ、ユーリィはメディアの髪型を決めかねているようだった。

今のポニーテールで俺は十分だと思う。

このままだと、夜中まで着せ替えごっこをし続けそうな勢いに辟

易し、俺は喚くユーリィを無視してメディアを連れて外に出た。

どうにも慣れない格好に戸惑っているのか、メディアは不安げに俺を見上げる。

「へ、変じゃないのです？」

「あぁ、大丈夫だろ。ほら、そこらの子供お前と同じような格好をしているじゃないか」

「・・・・・・」

俺はそこらを駆け回っている子供達を指さした。

安心させようと思って言ったのに、どうにもメディアは俺の返答が気に入らなかったのか、頬をふくらませる。

「・・・・・女の子がこういう質問をしたら、言うべきことは他にあるのです」

「何か言ったか？」

「本当に気が利かないと言ったのですっ。この唐変木っ」

べぇっと舌を出して怒るメディアに、俺はやはり子供はよく解らんと思った。

俺を見知った街の者からは、好奇の視線が突き刺さる。

さすがに隠し子か？　とからかわれたときには、思わず顔を引きつらせてしまった。

確かに年齢より上に見られることは多いが、さすがにショックだ。

一体俺がいくつの時の子だと、暴れたくなる。

きっとこういう光景を想像して、今頃ユーリィやデイル、アーヴィンは薄ら笑いを浮かべているに違いない。本当にあとで覚えていろよ・・・・・・。

メディアは衆目の視線など、全く気にしていないのか優雅(ゆうが)に道を歩いている。

一歩あゆむごとに、栗色の長い髪と白い天使の羽がふわふわと動いた。

見た目は地元の子供と一緒なのだが、やはり垢抜(あかぬ)けていて田舎(いなか)臭い雰囲気は一切無かった。

近所の悪ガキ共が顔を赤らめ、しきりに声をかけろと仲間同士小突き合っているのが見える。

見た目だけは可愛いからな・・・・・・。

勇気を出せ坊主共っ！　遠慮なく俺の代わりをさせてやろう。だから、メディアと遊びたいならさっさと来い。そして俺を解放してくれ。

そんな俺の心を見透かしたかのごとく、メディアはむっと睨(にら)む。

「ヒイロ、何をよそ見をしているのです！　しっかりエスコートして欲しいのです」

「・・・・・・・・・・・・・・」

何故女というものは、時々超常能力並みの洞察(どうさつ)力を発揮するのだろうか。

余計なことは考えまい。俺はもうあきらめた。

首輪をつけられ、散歩している犬とはこういう気分なんだろうか。

いや、違うな。奴らは楽しそうだ。

俺は犬のように幸せそうに尻尾を振る元気もない。

久しぶりの休日だというのに、俺は重々しいため息をついた。

街の中心部に来ると、道の端々に市が並んでいる。遠方の民芸品やら珍しいお菓子、装飾品など、それらは街の人々を楽しませているようだ。
もちろん俺やメディアも例外ではなく、普段では見られない品々を興味深く見つめる。

そんな中、俺は一つの店に目をとめた。

「お、そこのがたいの良い兄ちゃん。どうだい？　掘り出しもんだよ」

祭りのためにやってきた行商なのだろう。
木箱の上には上等のビロードの布が敷かれ、その上には大小様々な剣が並べられていた。
うぐっと俺は言葉に詰まる。視線が値札をいったりきたり泳ぎ、ゼロの数を数える。
ひーふーみーよー・・・・・・高い。
高いが、手が届かないわけでもない微妙な値段だった。
なんと迷う値段設定をするんだ行商人よ。
剣を新調しなければならなかったし、これは運命というものではないだろうか？　しかし、今月の家賃や食費を考えると、ユーリィが角をにょっきり生やしそうでもある。
どうすれば？　と頭をかかえて葛藤する俺に、行商人は肩をすくめた。

「なんせこの剣なんて滅多に産出されないクロム鋼を織り交ぜてあ

るからね。ここで買っておかないと、間違いなく後悔しますぜ」
「・・・・・・な、なるほど」

ここまで言われては買うしかあるまい。
行商が指し示す銀色の剣に、俺は吸い寄せられるように手を伸ばした。
しかし・・・・・・。

「やめておくのです、ヒイロ」

ふんっと鼻を鳴らし、俺がのばしていた手をメディアはぺちっと叩いた。
はっと我に返って、俺はメディアを見下ろす。
俺は今まで、一体何を考えていたのだろう。危ないと冷や汗をぬぐう。

「ははっ、お嬢ちゃんには剣なんて興味がないかなぁ。まぁ、男じゃないと解らない世界ってもんが・・・・・・」
「武器を見る目に男も女も、子供も大人もないのです。物を知らない素人相手と侮ってもらっては困るのです」

メディアは憤った様子で、木箱の上の剣を手に取った。

「クロム鋼を織り交ぜてある？　嘘なのです。本当にクロム鋼を混ぜて加工してあるならば、刀身は青灰色に輝くはず。こんな濃度の薄い銀色にはならないのです。しかも、なんなのです？　この重心の狂いはっ。こんなも剣と呼ぶのもおこがまっ・・・・・・」

そこまでだと俺はメディアの口をふさいだ。
業者は口元をわななかせ、顔は真っ赤になっていた。

行商のプライドというものもあるだろう。俺はまだ何か文句を言いたげなメディアを抱えて、その店を後にした。
店からだいぶん離れ、中央にある噴水へたどり着くと、俺はメディアを解放する。

「ヒイロっ！　お前はどっちの味方なのです。あんな詐欺まがいの・・・・・・」
「どちらの味方でもない。あいつはあいつで、商売で食っていかなければならんのだ。安い物を高く売ろうとする、それは常套手段だ」
「・・・・・・・暢気な話なのです」

騙される方が悪いんだと苦笑いする俺に、どこまでお人好しなんだとメディアは呆れたようだった。
歩き疲れたのか、ハンカチを敷き、噴水の縁に腰をかけたメディアに、俺は屋台で買ってきたリンゴ飴を差し出す。先ほど朝食を食べたばかりだが、女は甘い物は別腹とよく言うしな。
・・・・・・まぁ、別腹と言いつつ同じ腹だから、やれ太っただのと大騒ぎするんだろうが。
メディアは差し出されたリンゴ飴をしげしげと見つめた後、それをひったくった。

「こんなもので懐柔しようと思っても、甘いのです」
「素直にありがとうと言え」

可愛くないなと言えば、メディアは頬を赤らめ余計なお世話だと眉をつり上げる。
リンゴ飴をなめながら、メディアはふと俺に問いかけた。

「ヒイロは、あんな偽物ではなく、もっと良い剣が欲しいとは思わないのですか？」

「・・・・・・良い剣だと？」

探るような視線だった。

あぁ、ひょっとして出会い頭の勝たせてやるとか、パトロンになってやるとか、あの事だろうか？

まだ諦(あきら)めていなかったのかと俺は胡乱な目を向ける。

「俺は、ほどこしは受けん」

「そうではなくて、ただ純粋に強い剣は欲しくないのか？　と聞いているのです。そうすれば、公式試合に勝って賞金も手に入るし、名前も上がるのです。貴方は実と名声が欲しくないのです？」

「そうだな・・・・・・」

メディアの問いに俺はどうだろうと考え込んだ。

名声と実、剣士として生きる以上は欲しくないと言えば嘘になる。嘘にはなるのだが・・・・・・。

俺は目を伏せた後に、きっぱりとメディアに言い切った。

「いらんな」

「・・・・・・どうしてです？」

真剣な表情で答えを求めるメディアに、俺はため息をつく。

「確かに欲しくないと言えば嘘になるが。別に俺とユーリィが生きていけるほどの財なら、今のままで十分だし、悪い名声ではあるが「万年二位のヒイロ」やら「武器殺しのヒイロ」やら、そこそこは有名だしな。これ以上を望むのは分不相応というものだろう。俺は自分の大事な者を守るに足るだけの力があれば、それでいいんだ」

別に騎士の家系に生まれたわけでもなく、武勲(ぶくん)をたてる必要もな

い。
俺はただの平民の出で、ちょっと喧嘩っ早いだけのただの男で、剣とてきちんと誰かに習ったわけでもない。下手に良い剣など手にしても、自惚(うぬぼ)れて自滅するのは目に見えている。

「良い剣が無くとも、俺が腕をあげれば良いだけの話だからな。まぁ、気長に頑張るさ」
「・・・・・・・・・・・・・」

反論されるかと思ったが、メディアは何も言い返しては来なかった。
あまりにも俺の返答がありきたりすぎて、しらけたのかも知れないと思ったが、そうではないようだ。　何が嬉しいのか、メディアはうっすらと微笑んでいた。驚いたように俺が見ていることに気がつくと、慌ててそっぽを向いてしまったが。
メディアは立ち上がって、ぱたぱたと裾(すそ)を叩いてスカートのしわを伸ばし、空を見上げてぼそりと呟いた。

「皆が皆・・・・・・貴方のように思っているなるば、不幸など起こらないのです」
「なんのことだ？」

その消え入るような声はとても哀しげで・・・・・・。
なんでもないとメディアは言ったが、その時の俺にはとてもそうは思えなかった。

禍の予感

マッケローニの殺害の後、事件は犯人が見つからないまま、一度は収束を迎えようとしているかのようにみえた。

しかし・・・・・・。

「また、不審な惨殺死体が見つかったそうです。ヒイロ団長」

師団員の報告に、俺は沈痛なため息をついた。

あの後調べたところ、この12区で事件が起こる前に、1区、3区と別の区画で、同様の事件が立て続けに起こっていたらしい。

縦割り行政というか、区内で決着が付かなかったことに対する、師団のメンツを守る隠蔽工作とでもいうのか。情報がなかなか開示されず、現在に至ってしまったことが悔やまれてならなかった。

「それで次の被害者は何処で見つかったんだ？」

「はい、港の倉庫街で遺体が見つかったと。アーヴィンが現場の指揮を執って調査を進めております。手口から、またスライサーの事件である可能性が高いようです」

また、この12区で被害者が出てしまった。

俺は机の上に置いてあった、マッケローニの事件で押収した金属の破片を指ではじく。

どの事件でも遺体は切り刻まれ、剣は同様の不可思議な輪切りとなって、現場に散乱していた。それで　スライサーという名が犯人に仮称としてつけられ、事件は総じてスライサー事件と呼ばれるようになったわけだが・・・・・・。

「犯人は、一体何が目的なんだ？」

金品が強奪された様子ではない。
現場に出くわしたわけではなく、何とも言えないのだが、どうにもあの無数に刻まれた遺体からは、まるで殺人を楽しむかのような意図さえ感じられた。
縁者の線を当たっても、被害者となる者の共通点と言えば剣士であることでしかなく、何も尻尾をつかめるような事はでてこない。
正直、手詰(てづ)まりだった・・・・・・。

「夜の警備を強化する。１２区の東側はデイルを指揮に3人、西側はアーヴィンを指揮に・・・・・・」

今まで１０人でも多いと思った師団が、手薄に思えて仕方がなかった。
１区画をたった１０名の師団員で警備するというのは、平和だからこそ成り立っていたことであって、こういう非常時になるとどうしようもない。
中央に申告(しんこく)した増員派遣が間に合えば良いと思うが、状況は刻一刻を争い、それほど悠長に構えていられるはずもなかった。

「ヒイロ団長？」
「いや、なんでもない。そうだな、南には俺が行く」

物思いにふけりかけ、俺は首を横に振った。
無い物ねだりを今しても仕方がない。現状でできうる最善をつくすしかないのだ。
師団員が指示に従って部屋を出て行き、一人になった俺は備品である剣を引き抜く。
鈍い鋼色の刃は、所々かけた部分があった。この剣もそう長くないだろう。

『最強たるは誰なりしや？』

ふいにメディアの言葉が脳裏に思い返された。あれ以来、メディアは師団の詰め所には姿は見せていない。たぶん飽きたのだろう。

子供とは気が多く、移り変わりの早いものだ。

「最強たるは、誰なりや・・・・・・か」

強くなりたいとは願った。

俺は貧しく学もなく、剣士になって食っていく以外に道がなかったから。

残念ながら才能に恵まれなかったようだが。それはこの欠けて今にも折れそうな刃がありありと語っている。

俺は苦笑いをして、剣を鞘に戻した。

「迷ったところでしょうがない。スライサーがどんな化け物かは知らんが、俺は職務を全うして戦うしかない」

窓を見れば空は薄暗く曇り、ざぁざぁと雨が降り出した。

殺害が起こるのは必ず夜。

俺は外套を羽織り、詰め所を後にした・・・・・・。

「12師団、紅蓮の獅子。全員そろっているかっ」

明かりを手に、アーヴィンが点呼を始める。

師団員からは緊張したような返事が返ってきた。不安げなその表情に、俺はしっかりしろと檄(げき)を飛ばすが、内心では仕方ないと思う。
街の治安を預かる師団と言っても、このような事件に出くわすことなど今までなかった。
あまつさえ、敵は正体不明の殺人鬼ときたもんだ。
不安に思うなというのも無理がある。

「そうっすよ。いざとなったらヒイロ団長を盾にして一目散に逃げるっす」
「・・・・・・お前の俺への気持ちはよくわかったデイル」

茶化すデイルの頭を、俺は背後から殴った。
うげっと悲鳴を上げてデイルが頭を抱えてうずくまり、師団員からは失笑が漏れて、若干空気が和らいだ。
こういう気遣いができるのがデイルの良さだろう。俺はむすっとしつつも、すまないなとぼそりとデイルに向かって呟(つぶや)いた。デイルはへへっと笑って、自分の担当である東側へと師団員を引き連れて走っていった。
その背を見送り、俺はアーヴィンに向き直る。

「では、予定通りアーヴィンは西側へ俺は・・・・・・」
「団長？　どうしました？」

ふいに言葉を途切れさせ、表情を険しくした俺にアーヴィンは驚く。
俺は無言でアーヴィンの横をすたすたと通り過ぎ、電柱の影へと手を伸ばした。

「・・・・・・何をしている？」
「な、何をしていようと、そんなの私の自由なのです」

がしりと首根っこをひっつかみ、俺は電柱の影に隠れていたメディアを引っ張り出した。
変装のつもりなのか、丸メガネをかけ、帽子をかぶったメディアがうわずった声を上げる。
その光景に、アーヴィンはあちゃぁっと顔を手で押さえた。

「子供がこんな夜ふけに何をしているっ！　さっさとベットに入って寝ろっ」
「そんなことを貴方に命令されるいわれは無いのです。私には、私の仕事があるのだから、邪魔しないで欲しいのですっ」

強情に言い張って、メディアは俺に向かってしっしと手を振った。
俺の中で何かがぷちんと切れる音が聞こえる。

「ほぉう、仕事だと？　電柱の影に隠れて、俺たちの動向をこそこそ探ることがか？」
「こそこそとは何ですかっ、まるで盗人のごとく言うなんて失礼な。私にはやらなければならないことがあるのです」
「だから、子供のごっこ遊びは陽がたかいうちに、子供同士でやれと言って・・・・・・」
「ま、また、私の事を子供扱いして馬鹿にしてっ！　きぃぃぃっ、クラインヴェル家のレディー・メイアに向かって、こんな失礼な奴は初めてなのですっ。なんたる屈辱(くつじょく)っ」

放せとメディアはこともあろうに、俺の足のスネを蹴った。
思いの外強い衝撃(しょうげき)に、俺は痛みで口の端をつり上げる。

「き～さ～ま～ぁぁぁっ・・・・・・」
「だ、団長落ち着いてください。こんなことしてる場合では無いで

しょうっ！」

いい加減にしてくださいと叫ぶアーヴィンに、俺はなんとかその場は怒りを収めた。

アーヴィンの言うことは正しい。次の被害者を出さないためにも、早く警備に付かなければならないのだ。

俺は自分の目線まで、つかんだメディアを持ち上げる。

「お前、家はどこにある？」

「西側の宿場街の風見鶏亭という所に借宿をもうけているのです」

「そうか・・・・・・アーヴィン」

俺は降ろせともがくメディアを肩に担ぎ上げ、アーヴィンにすまないと頭を下げた。

察したアーヴィンはにっこり微笑む。

「悪いがお前は南へ部隊を率いて行ってくれ。俺はこいつを宿に送り届けて、そのまま西区の警備につく」

親の顔を見て一発文句を言ってやらんと気がすまんと憤る俺に、アーヴィンはわかっていますと苦笑いした。急な変更にも気を悪くした様子もなく、アーヴィンは素早く南側の警備の配置を部隊へ指事していた。

その姿に、俺は本当ならばアーヴィンこそが、団長を務めた方がいいのだろうなと感じた。

俺と違って冷静で、人当たりも良く、頭も良い。

剣の腕が俺の方が上だからと言う理由で、アーヴィンは団長の座を辞退したのだが、本当は俺の経済状況を思っての行動なのは、口に出さずとも解っていることだった。

本当に、アーヴィンには頭が下がる思いだ。

「気をつけろよ、アーヴィン」
「はい、団長も無理をなさらず」

アーヴィンは強気に笑って、部隊を率い南側へと出発していった。
その姿が見えなくなるまで見送り、俺はさてと肩に担がれふてくされるメディアを睨んだ。

「送ってやるのはこれ一度きりだからな。金輪際俺の手をわずらわせるなよ」
「誰も送って欲しいなど言ってないのです。何を勝手に宿に帰るなど話を決めているのですか！　ようやく余計な外野がいなくなったのですから、私たちもスライサーを探しに行くのですっ」
「だから・・・・・・正義の味方ごっこをやりたいなら、子供同士で遊べ」

厄介な子供にからまれたものだと俺はため息をつく。
殺人鬼相手にしなければならないというこの非常時に、冗談ではなかった。
まったく、このメディアのお気楽具合はなんなのだろうかと俺は思う。本当に貴族という輩は頭のネジがゆるんでいるとしか思えない。

「貴方だけではスライサーは倒せないのです」
「お前がいれば倒せられるとでも言いたいのか？」
「もちろんなのです」
「貴族というのは、本当に頭がおかしいとしか思えない・・・・・・」

子供というのは根拠のない自信をもちがちなのは、俺も幼い時に

経験済みだ。
無謀なけんかをふっかけて痛い目を見たことは数知れない。
しかし、さすがに殺人鬼相手に正義の味方ごっこするほど阿呆だったわけではなかった。
それは別に俺が良識を一応持っていたとかという話ではなく、世間一般の子供は普通そうだろうと思う。

一部の馬鹿貴族をのぞいての話だが・・・・・・。
メディアは俺の棘(とげ)のある言葉に、口の端(はし)をつり上げた。
「頭がおかしいのは貴方の方なのです。あんな使い方していたら、剣が壊れてばかりなのも納得なのです」

やれやれと肩をすくめるメディアに、俺は顔をしかめる。
やけに自信たっぷりに講釈をたれるメディアに、俺は性格が悪い奴だと思った。何も知らない子供のくせに、解ったような口をきかれて良い気はしない。

「俺の腕が悪いことなど、いちいち子供に指摘されずとも解っている」
「・・・・・・そういう結論に達するから、貴方は頭がおかしいのです。自分の事なのに、何も解っていないとは」
「一体、お前は何が言いたいんだ？」
「解らない者に、言ったところで無駄なのです。今まではそこらのヘボ剣士やごろつきが相手だったから、それでもなんとかなったのでしょうけど、スライサーを相手に、今の戦い方を押し通すつもりなら、貴方は間違いなく死ぬのです」
「・・・・・・」
縁起(えんぎ)の悪いことを言う奴だと俺は目を伏せた。

俺は宿場街の桟橋へとさしかかる。
メディアが言った風見鶏亭はここからそう遠くない場所にある、宿場街で一番大きく上等な宿だ。
メシが旨いので、宿泊せずとも食事だけという者も少なくない。料金はかなり割高なので、貧しい俺にとっては全く縁がない場所の一つなのだが。
そこを借宿として長期滞在してるというならば、メディアの実家はよほど裕福なのだろう。
うらやましい限りだ・・・・・・。

洒落(しゃれ)た石造りの門柱をこえ、風見鶏亭にたどり着いた俺は、宿の従業員に案内されてメディアの借りている部屋へと向かう。

「本当にいらぬ時間をとらされた。俺も早く警備に向かわなければならないが、一言お前の親に注意をだな・・・・・・」
「無駄なのです。だって・・・・・・」

メディアの借りている部屋の前に立ち、俺がドアをノックすると部屋の中から男の声がきこえた。しばらくして、がちゃりとドアが開かれる。
出てきたのは、黒い礼服を着込み、ネクタイを締めた中年の男だった。無表情で灰色の瞳の片方にはモノクルをつけている。高い鷲(わし)鼻(ばな)でインテリ臭い雰囲気が漂うこの男が、メディアの父親なのだろうか？　と考えかけたが、俺の予測は男の次の行動で覆された。

「お帰りなさいまし、メディアお嬢様」
「出迎えご苦労なのです、セイレン」

深々と一礼するその様に、俺はこの男がメディアに仕える執事な

のだと悟る。
　メディアは俺の肩から飛び降り、執事であるセイレンを背にすると俺を見上げた。
「ここに滞在しているのは私と執事だけなのです」
「・・・・・・なるほど」
　親に説教しようとしても無駄だとメディアは勝ち誇ったように笑う・
　ならば、それはそれでかまわないと俺は思った。執事ならば自分の主の無謀を諌めるのもまた仕事だ。さぁ話を聞けと、また両手を振り上げ騒ぎ出したメディアの頭を、俺はがしりと押さえ、淡々とセイレンに向かって進言した。
「子供は夜中に出歩かさせず、ベットで寝かしつけろ」
「御意・・・・・・」
「セ、セイレンっ！　何をへりくだっているのですっ。主人たるこの私に無礼を働く男なのですよっ。言い返してやらずにどうするのですっ」
「そうは言われましてもメディアお嬢様。この方はお嬢様のパートナー・・・・・・プロミス・ユーザーになられる方ではないのですか？　それならば執事の私が敬意（けいい）を払わなければならないのも、当然のことかと・・・・・・」
「プロミス・ユーザー？」
「あぁ、なんでもないのですっ。それは私が後できちんと説明するのです。セイレン、主である私を差し置いて勝手に説明しないで欲しいのですっ！　こういうことはもっと厳（おごそ）かに、場の雰囲気を選んで私は話をしたいというのにっ」
「しかし、お言葉ながらお嬢様・・・・・・」
「黙るのです、セイレンっ、私の言うことが聞けないのですかっ」

「・・・・・・・・・・・・・・うるさい」

俺は顔をしかめて耳を押さえた。ここで不毛(ふもう)な言い争いをしている暇ではない。

俺はもういいと、言い争うメディアとセイレンに背を向けた。

すたすたと階段を下りる俺に、慌ててメディアは追いすがる。

「待つのですっ、貴方だけではスライサーは倒せないと言ったのです」

「いい加減にするんだ、メディア」

俺が声を荒(あら)げると、メディアはびくりと身体をすくませた。

狼狽(うろた)えたように言葉につまるメディアに、俺はきっぱりと言い切った。

「倒せる倒せないが問題じゃないんだ。俺はこの12区の師団の団長で、この区に住む者立ちの治安を守らなければならない。それにはお前も含まれている」

子供の遊びではないし、子供が首を突っ込んで良い問題ではない。

もう大人しくしていてくれと言う俺に、メディアは唇をかんで下をうつむいた。

「貴方もお父様やお母様と同じことを言うのです。無理だって言うのですっ」

「・・・・・・なんのことだ？」

「私以外じゃ駄目なのです。私以外だったらミレーヌは・・・・・・」

メディアの続きの言葉は響く悲鳴と、ばたばたと慌ただしい足音

にかき消された。
従業員が血相を変えて、俺を呼びに飛んでくる。
俺が人垣をかき分けて門へとたどり着けば、そこには師団員が倒れ込んでいた。アーヴィンと共に西側に向かった師団員だった。
肩から腕がすっぱりと切り取られ、身体には無数の切り傷が刻まれている。肩から切り落とされているので、傷口を縛って止血しようにも簡単にはいかない。
俺は従業員から貰ったタオルで必死で傷口を押さえた。
「おい、しっかりしろっ！　一体何があった？」
俺が呼びかけると、辛うじて口を動かす。
耳を近づけ、俺はなんとかして声を聞き取ろうとした。
この傷で、よくここまで知らせに来たと俺は慟哭(どうこく)する。
たるんでいると、文句ばかりを言っていた俺自身が、恥ずかしくて仕方がない。自分が団長を務める師団員達は、こんなにも必死で自分の職務を全うしようとする奴らではないか・・・・・・。
「に、西が・・・わの、工場跡地で、す、スライサーと遭遇。アー・・・ヴィンさんが、俺たちを、逃がそうとして、ひ、一人で・・・・・・」
残った方の手をふるわせながら、俺の腕を掴む。
そして、ぱたりと力を失った手は地面へと落ちた。それ以上言葉が紡がれることもない。
俺は見開かれたままの目を閉じさせ、ゆっくりと師団員の身体を地面に降ろす。
遅れてやってきた役所の人間に後をたくし、俺は風見鶏亭を飛び

出した。

「私も行くのです！　連れて行くのですっ」

服の裾(すそ)をつかんだメディアの手を振り払う。

先ほどの深刻な表情に、何か事情はあるのかもしれないとは思ったが、殺人鬼の前に連れて行けるはずもない。哀しげにゆがんだメディアの顔を視界の端(はし)に捕らえたが、俺はすっと顔をそらして前を見る。

地面を蹴って前へ前へと俺は疾走した。

街の地理は知り尽くしている。最短距離を俺はだたひたすら突っ走る。

周りの風景が残像のように流れていった。

血に飢えし者

閉鎖(へいさ)されているため、工場跡地には鉄線が張り巡らされている。
俺はぐっと地面を踏みしめ、一息でその柵(さく)を跳び越えた。ずしゃっと地面に着地し、剣戟(けんげき)が響く方へと向かう。どんどん嫌な感じが酷なる。
これは殺気かと俺は身震いした。こんな激烈な感覚はいまだかつて感じたことはない。

工場内に入ると、倒れているアーヴィンが目に入る。

「アーヴィンっ！　無事かぁっ」

俺の叫びに、アーヴィンが顔を上げた。
生きているということに、俺は心底安堵(あんど)した。
瞳を見開き、アーヴィンは俺に向かって必死に叫び返す。

「駄目です団長っ！　来てはいけないっ」

アーヴィンの静止に、俺は一瞬足を止める。
それが幸いした。俺が空気の動きを感じて横に飛んだ後、俺のいた場所の地面が縦に切られて裂(さ)けたのだ。何が起こったのか？　その答えはすぐにわかった。

「・・・・・・お前がスライサーか」

俺はごくりと喉(のど)を鳴らして目の前の男、スライサーに剣を構える。
白いの長い髪の隙間(すきま)からのぞく、不気味な赤い目は楽しげに細められ、口は半月状につり上げられて、犬歯がのぞいていた。

その手には、歪(いびつ)な巨大な剣が握られている。
俺はこんな禍々(まがまが)しい剣を始めて見た。
一体何の材質でできているのか、真っ黒な闇のような刀身には紅い模様が刻まれている。
まるで血のようなその赤は、剣の異質さに拍車をかけていた。

実力のほどは未知数・・・・・・。
あのマッケローニを一方的に惨殺(ざんさつ)した事から、腕は相当なものなのだろうと俺は推察した。
油断できない相手に、俺は神経を尖(とが)らせる。

『最強たるは・・・・・・誰なりしや・・・・・・』
「なんだとっ？」

俺は思わず問い返した。
スライサーは目を見開いて奇声を上げる。

『最強たるはっ、この俺だぁぁぁぁぁぁっ』

闇の刃をひるがえし、スライサーは俺に向かって突進。フェイントを交えた動きは攻撃を幻惑(げんわく)させる。
惑わされるかと、俺は剣を構え眼を細めた。アーヴィンが傷口を押さえつつ、叫んだ。

「いけませんっ、団長っ！　その刃はっ」
『もう、遅いっ・・・・・・』

スライサーの刃が俺めがけて振り下ろされる。
俺はその刃を剣で受け止めようとしたが、ふと背中に悪寒が走った。

なんと説明して良いかは解らない。まるで予感めいたその何かは、俺の身体を横へ回避へと突き動かしていた。

「なっ・・・・・・・」

スライサーの刃が俺の剣をかすめる。

俺は目を見開いた。待ち構えていた衝撃(じょうげき)は何もない。ただ、まるで紙でも切るかのように、スライサーの刃は俺の剣を切断していく。

俺の脳裏に、今までの被害者の現場に落ちていた金属片を思い出させた。

あれはスライサーの刃を剣で受けようとし、被害者はそのまま剣ごと切断されたのだ。

「くっ・・・・・・・」

俺は辛うじてスライサーの刃を避(よ)けきって、体勢を立て直すために後ろへ飛んだ。

からんっと俺の剣の刀身半分が、地面に重い音を立てて落ちる。俺は予備の短剣を腰から引き抜き、スライサーに構えるが、正直状況はかなり悪い。

スライサーの剣を、自分の剣で受け回避する手段は仕えないのだから、相手の剣を体術だけで完全回避した上で、スライサーを仕留めなければならないのだ。

相手の力量は、先ほどの剣筋からマッケローニよりは確実に上。

動きはなんとか読めるが、剣を使って防御できないというリスクが大きく俺にのしかかる。

『俺の剣の威力を知らずに飛び込んで、回避できたのはお前が初めてだ・・・・・・。上物だ、上物だぁっ・・・・・・・ひっ、ひひっ』

スライサーは狂ったように笑い声を上げた。
ひとしきり笑った後に、先ほどの狂った姿が嘘のように、真剣に表情を引き締める。
仄暗(ほのぐら)い光をたたえた目で俺を見据(みす)え、先ほどの型も何もない適当な一撃とは打って変わって、剣を水平に構えた。切っ先は微塵(みじん)もぶれない。
押しつぶすような殺気がさらにふくらんだ。

思わず俺の足は一歩後退する。

今まで、これほど戦いが怖いなどと思ったことはなかった。
しかし、ここで引き下がることは俺の矜持(きょうじ)が許さない。
俺はそれ以上後退しない。足を肩幅に開いて、低く短剣を構えた。
ちりちりと空気がやけるようだ。時間の経過が無限のごとく感じる。
いつもの静寂はなく、バクバクと自分の体内から響く心音がやけに大きく聞こえた。

つぅっと頬に汗が流れる。嫌な想像ばかりが頭に浮かぶ。

『そちらから来ないなら、私からいくぞ・・・・・・』

スライサーが先手を取る。
地面を踏み切り、下段からの切り上げ。これを俺はバックステップで回避し、続く行動でスライサーの顔面めがけて蹴(け)りを放った。
本来、剣同士の戦いに体術での攻撃を織り交ぜるなど、無粋も良いところだと思うのだが、俺の獲物(えもの)は不得手の短剣であり、相手の大剣とは圧倒的にリーチの差がありすぎる。

「大人しく、投降(とうこ)しろスライサー」

『興ざめするようなことを言ってくれるなっ』

大剣でありながら、スライサーはまるで羽でもにぎっているかのように、縦横無尽に刃を繰り出してきた。俺はそれを紙一重でかわしながら、チャンスをうかがう。

本来なら生かしたままの捕縛が好ましいが、そんなことを言ってられる相手ではない。

確実に行動不能に陥れられるような手傷を負わせなければ、次の瞬間自分こそが真っ二つに切り裂かれているだろう。

俺は攻撃をかいくぐり、スライサーののど元めがけて短剣を突き出す。

それを読んでいたスライサーは剣の腹の部分で俺の短剣を受け止めた。俺の短剣が砕ける音と、奇妙な甲高い声が響く。

「・・・・・・女の悲鳴？」

気のせいかも知れないが、悲鳴は剣から響いたように聞こえた。聞けば胸が締め付けられるような悲痛な声に、俺は動揺する。

「団長っ、避けてくださいっ！」

アーヴィンの声に俺は我に返る。

咄嗟に身体をひねったが、完全に回避はできなかった。

肩の辺りに嫌な感触が走り、激痛と血しぶきが上がった。

飛び散った血が目に入り、俺は慌てて目をこすったが前がかすんでよく見えない。

『なんだ、呆気ない。所詮はこの程度か・・・・・・お前もさっさと、我が剣の贄となるがいい』

「そうはさせないっ、団長逃げてくださいっ」

どんっと俺をアーヴィンが突き飛ばした。
驚いて俺は目を見開く。アーヴィンの困ったような笑顔が霞(かす)んだ視界に見えた気がした。
次の瞬間、どぼんっと俺の身体は工場内にあった水路に落下する。
げほげほと咄嗟に飲み込んでしまった水をはき出し、俺は水面から顔を出した。
「アーヴィンっ・・・・・・アーヴィンっ！」
俺は壁に備え付けてあるはしごに手を伸ばし、なんとか陸に上がろうとしたが、それは叶わなかった。　雨で増水していた水路の流れは思いのほか速く、俺の手はもう一歩のところではしごをつかみ損ねた。
濁流(だくりゅう)に乗って、俺の身体は無理矢理工場の外へと流されていく。
出血で遠のく意識の向こうで、俺はアーヴィンの断末魔を聞き、その後目の前は真っ黒にフェードアウトしていった・・・・・・。
後日、市街の水路で運良く救出された俺は、病院のベットの上で目をさまし、泣きはらした目のデイルから、アーヴィンが遺体(いたい)で回収されたことを聞かされたのだった。
俺は無精(ぶしょう)ひげが生えただらしない様相で、無気力にベットから青い空を見上げていた。

今頃アーヴィンの葬儀が行われているのだろうと思うと、俺はいたたまれない気分になった。
俺は鬱憤をはき出すように、壁を拳でなぐる。
肩に激痛が走り、俺はうめいた。

「一体、何をやっているんだ。俺は・・・・・・」

スライサーを取り逃がし、アーヴィンをはじめ、南側の警備についた師団員は全員が命を失うという結果になった。
本当ならば、俺が南側の警備に付くはずだったのだ。そうすれば、被害は俺だけで済み、アーヴィンや他の師団員達の命は助かったというのに。

「アーヴィン、お前がいなくなってどうする？　お前には守るべき者も、これから生まれる新たに守るべき者もあるだろう。それなのに・・・・・・」

俺は枕に顔を押しつけて嗚咽をもらす。
本来俺がやるべきだった役割を、デイルは果たしてくれた。
俺が怪我で数日意識を失っていたので、その間に残された妻へと、デイルがアーヴィンの殉職を伝えてくれたのだ。
デイルは、大丈夫だと気弱に笑っていたが、身重である女性に愛する夫の死を告げることが、どれほど酷だったのかは想像に安い。

こんこんっと病室のドアがノックされる。
俺の返事も待たずに、ドアががちゃりと開かれ、メディアが入ってきた。

市街の水路で浮いていた俺を発見し、病院に運んだのはメディアとその執事であるセイレンだったらしい。

とても相手をしているほど心に余裕はなかったが、助けて貰った借りからか、俺はメディアを邪険には扱えなかった。

「傷の具合はどうなのです？　まぁ、肩の傷より別の傷の方が重傷のようですが」

メディアは備え付けの椅子（いす）の上にすわり、胡乱（うろん）な目で俺を見ている。

俺は枕へと背を戻し、再び窓の外へと目を戻した。

沈黙が続き、メディアが気まずそうに口を尖（とが）らせる。

「なんとか言ったらどうなのです。いつもは私が何かを言ったら、すぐ失礼な言葉を返すくせに・・・・・・調子が狂うのです」

しりすぼみにメディアの声が小さくなった。

無理に気をつかっていることが解った俺は、普段にない態度のメディアにくすりと笑う。

それに気がつき、メディアは口をぱくぱくさせて赤面した。

「なっ、何を笑っているのですっ。そもそも、貴方が私の忠告を無視し、一人突っ走った結果がこの有様なのですっ。心配して追いかけて来てみれば、水路にぷかぷかと浮いているわ、大怪我して病院に担ぎ込んでの大騒動。アーヴィンは・・・・・・」

メディアは不意に言葉を切りうつむいた。

「アーヴィンのことは・・・・・・相手が悪かったのです」

「相手が悪かっただと？」

俺のせいではないとメディアは言いたかったのだろうが、変に慰

められた方が余計に傷つくというものだ。普段なら子供が浅慮(せんりょ)で言っていることだと流せても、今の俺にそれだけの余裕は無い。
はっと俺は吐き捨てた。

「アーヴィンが死んだのは俺のせいだ。俺が南側の警備に行ってなければ死ななかった。俺が呆けて隙を作ったから、俺が弱いから、俺がもっと強ければアーヴィンは死なずに済んだんだ。いつもそうだ、にこにこ笑って控えめで・・・・・人が良すぎる？　それは俺のような馬鹿者のことではなく、自分をためらいもなく犠牲にできるアーヴィンのような奴の事を言うんだっ」

息をつくまもなく喋(しゃべ)り、俺ははぁはぁと息を荒げた。
ずきずきと肩の傷が痛むが、それ以上に胸の中の鉛のように重いしこりの方が存在が大きい。
メディアはそんな俺をじっと見つめた。

「気は済んだのですか？」
「・・・・・・なんだと？」
「自分をおとしめて、可愛そうな自分を慰める自己満足は気が済んだのですか？」

俺はかっと目を見開いた。
ぎりっと噛(か)んだ唇からは血の味がした。
見つめてくるメディアのエメラルドの瞳を俺は見返した。
その透き通るような碧緑の色に、わき上がった激情が沈静されていく。
メディアの言っていることは間違っていないと俺は項垂れた。こんな病室のベットの上で、俺は何をうだうだと考えている？　今さら悔やんでも、殺されたアーヴィンは戻ってこないのだ。なんと情けないことか・・・・・・。

メディアはうつむく俺に、ため息をつく。

「大事な人を失ったのは貴方だけではないのです。スライサー・・・・・・奴から私は、なんとしてでもミレーヌの・・・・・・ミレーヌの剣を取り戻さなければならないのです」

スカートの裾(すそ)をぎゅっと握り、メディアは決意に満ちた表情で呟いた。

一体何のことだ？　と俺は訳がわからなかった。

困惑する俺に、メディアはようやく話を聞く気になったようだと息を吐く。

メディアは足をぶらぶらさせつつ、思い出すように語り始めた。

「ミレーヌは、我がクラインヴェル家の遠縁の子なのです。曾祖父の妾の子・・・・・・まぁ、表沙汰にできなかった子の血縁者という奴なのです。不慮の事故で両親が亡くなり、天涯孤独になったので、我が家がミレーヌを引き取った。そういうことなのです」

よくある話だというメディアに、俺は苦い気持ちでいっぱいになった。

簡素に語るメディアの言葉の裏では、色々あったのだろう・・・・・・。

なにかと貴族というものは、継嗣(けいし)問題やら血縁についての問題がつきまとう。正直、この年頃の少女が、そういう大人の間のもつれを知ることを俺は好ましく思えない。

しかし、知らずにいられるほど貴族の社会は甘くもないのが事実だった。

「まぁ、大人達の諍(いさか)いはともかく、私はミレーヌのことを姉のよう

に思っていたのです。ミレーヌは年頃とあって、クラインヴェル家に出入りしていた一人の騎士に恋をしたのです。その騎士は名実を求め切磋琢磨していたので、ミレーヌはなんとかしてその騎士の力になりたかったのでしょう・・・・・・」

それが悲劇を生んだのだとメディアの表情がゆがむ。

ミレーヌはクラインヴェル家が秘匿(ひとく)してあった剣を盗み出し、それをこともあろうにその騎士に与えてしまったのだ。

本来クラインヴェル家の直系である者しか、受け継がれるはずもない剣を、傍流であるミレーヌが盗み出したことに一族は激怒し、ミレーヌはその騎士ともども家から追い出された。

「はじめのうちこそよかったのです。しかし、その騎士は徐々にその剣のもつ威力に魅せられ、ゆがんでいったのです。取り返しがつかなくなった頃、ようやくミレーヌは己の過ちに気がつき、騎士から剣を取り返したのですが・・・・・・・」

「殺されたんだな・・・・・・」

メディアの最後まで発せられずに濁(にご)した言葉を、俺は継いで低くうなった。

そのミレーヌを殺害して剣を奪った騎士、それこそがスライサーなのだろう。

俺はスライサーが持っていた禍々(まがまが)しい剣を思いだし、拳が震えた。

「あの剣は、持つ者を選ばなければならないのです。資格がない者が持てば、剣に飲まれて自滅する。そういう剣なのです。一族の者は、あの剣を破壊するつもりなのですが・・・・・・私は、あの剣をなんとしても壊さず回収したいのです」

だから執事を連れて、ここまで一人で追ってきたのだと、メディ

アは決意に満ちた表情で俺に打ち明ける。
経緯はわかった。姉と思っていた存在を殺害された無念も、アーヴィンを失った俺にはよく解る。
しかし・・・・・・。

「メディア、お前は大人しく実家に帰れ・・・・・・」
「ど、どうしてなのですっ？」

食い下がるメディアから、俺は視線をそらした。
スライサーに相対したからこそ解る。あの剣は尋常ではなく、スライサー自身も相当の使い手だ。
剣を取り返したいと望んでも、スライサーを倒さない限りはそれも叶わないし、子供が首を突っ込んで解決できるレベルの話ではないのだ。

「大丈夫なのです。ヒイロ、貴方と私が一緒なら・・・・・・」
「俺は、スライサーに負けたんだ。俺じゃ、どうにもならない」

悔しいがそれは厳然たる事実だ。
肩の負傷を考えても、これからとれる最善の策は、中央からの増援部隊を待ち、共同戦線をはってのスライサー討伐しかない。
それでも多くの犠牲を覚悟しなければならないだろう。

「・・・・・・逃げるのですか」

メディアは椅子から立ち上がり、怒りと宿した目で俺を見下げ果てたのよう見た。
そう取られても仕方ないと思う。
メディアを巻き込みたくない等というのは、言い訳にしか聞こえないだろう。

「アーヴィンの仇を取りたくはないのですかっ？」
「あぁ、今さら死んだ者のことをどうこう言ったところで、どうしようもないからな。俺はアーヴィンの敵を討つことより、自身の命の方が惜しいんだ」

俺は皮肉げな笑みを作った。
心ない嘘の言葉は刃となって、俺自身へと突き刺さる。
無言で俺とメディアは見つめ合う。先に視線をそらしたのはメディアだ。
メディアはうつむいて一言、そうですか・・・・・と失望の言葉をもらし、病室から出て行く。

ドアが閉まった事を確認し、俺はこれで良いと顔を手で覆って目を閉じた。

これで良い・・・・・。犠牲となるのは、俺一人で十分だ。
差し違えても、必ずアーヴィンの仇（かたき）はとる。
俺は静かに、怨嗟（えんさ）をはき出したのだった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7056z/

ARMS MAKER'S　刃の姫

2011年12月24日10時49分発行